

最初の来日フランス人修道女

メール・マティルド

富田仁



メール・マティルド

横浜外人墓地の管理事務所
の横の小径を北の方角
四、五十メートルほどのと
ころ、第十区にサン・モール

会 Dames de Saint-Maur
の修道女たちの墓がある。
わが国における最初のフラ
ンスカトリックの修道女の
活動は明治五（一八七二）
年六月二十八日、メール・

マティルド・ラクロ Mère Ste. Mathilde Raclot の来日に始まり、その墓に葬られているのである。閉じて、その墓に葬られているのである。

最近、マティルドの生地であるフランスのヴォージュ県シュリオ
ヴィル Suriauville の役場のマユール・ダニエル Mayor Daniel
氏のお骨折りで、その生家の写真と地元紙が伝えるメール・マティ
ルドに関する記事のコピーを入手した。

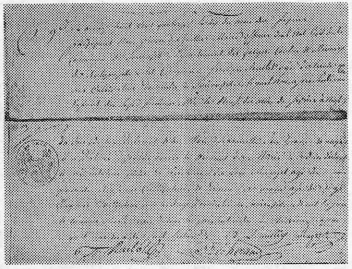
マユール・ダニエル氏によると、マティルドの生家は現在では他人の所有になっていて、ラクロ家の子孫はいない。ラクロ姓を名乗る家は三軒ほどあったが、数年前にそのひとり病没して、いまはラクロ家はないという。

一九五二年の地元紙の記事は「日本における最初の修道女、シスター・マティルド・ラクロ、一九一一年にはほぼ百歳で死す」という見出しのものである。

「彼女は伝道の空に光の航跡を背後に残して流星のように過ぎ去った。」

このような書き出しで、メール・マティルドの功績が称えられている。

シュリオヴィルの役場に保存されているマティルドの生誕戸籍（写真）によると、マティルドは一八一四年二月九日夜八時にシュリオヴィルでマリ・ジュスティヌ・ラクロ Marie Justine Raclot として生を受けている。彼女は農夫の父フランソワ・ラクロ François Raclot（三十四歳）、母マリ・ラミレール Marie Lantrelle の子であった。一八一六年六月二十三日には、弟フランソワ・ゲザヴィエ

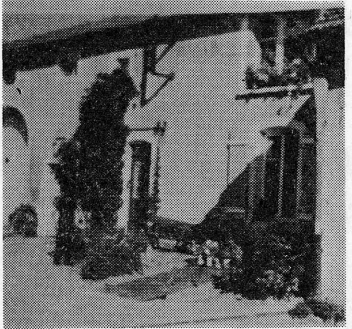


マティルドの生誕戸籍

Francois Xavier が生まれている。

大変敬虔なカトリック教徒である身分の高いラクロ家の出であるマティルド・ラクロは父方から控え目な謹厳さ、母方から厳格な教育を受けついでが、こうしたことが彼女をして宗教上の義務に忠実にし、苦難にあつては強く、勇敢

で、謙虚な、従順な女性にしたようである。一八二一年にマティルドはシュリオヴィルのエコール・ド・ムッシュ・ピュルティエ Ecole de M. Pultier という学校に入った。そこはピュルティエがひとりで教えている小規模な学校であった。一八二七年、マティルドは最初の聖式式を行なったあと、シュリオヴィルから数マイルの距離にあるラングレー Langrès のサン・モールの幼きイエズス会 L'Enfant Jésus の寄宿学校に入った。寄宿学校ではメール・リエゴール Mère Liegault の薫陶を受けた。メール・リエゴールはフランス革命のときにボルドーから追われてパリに出たが、一七九四年のマダム・エリザベートの殉教のあと、生まれ故郷のラングレーに戻って、納屋のような小さな建物に学校を開き、見棄てられていた子どもたちの教育を始めた。読み、書き、働きとくに祈ることを子どもたちに教えた。当時、修道院を追い出された修道女たちがラングレーにいて若い人びとの教育に当たっていたが、やがて富裕な家庭は娘たちをメール・リエゴールのところに預けるようになった。ここに一



マティルドの生家

種の寄宿舎がつくられ、一八〇四年以来寄宿学校と通学学校が開かれたのであった。

シュリオヴィルの地元紙では「十八歳のとき、みんなにはそれが美、青春、愛情、安楽、自由を犠牲にすることが氣違いじみたことであるときに、彼女はAダム・ド・サンモールVと呼ばれる幼きイエ

ズス愛徳修道会に入った」と伝えられているが、マティルドのサン・モール会入会の時期については一八二七年の幼きイエズス会の寄宿学校入学の年をそれとみなすか、メール・リエゴールと出会い、その薫陶のちに終生神への道に専念する決意をした年とするかによって二説に分かれるようである。

マティルドは修道女としての生涯を選ぼうという決意を固めたとき、従弟のヴィクトルに打ちあけ、ヴィクトルから両親に伝えてもらったようである。父親は娘の人生決定に同意したが、母親は反対した。この母親の反対はマティルドの生涯の悩みとなるのだった。

一八三五年三月十九日、マティルドは初聖願をたて、南フランスのパニョル Bagnols で修練生活を過すことになった。そのあとピアジェ Prager, セット Sette, ベジエ Béziers に移り、修道女としての研鑽を積んだ。

サン・モールの創始者ニコラ・バレ Nicolas Barré (一六二一—一六八六) は「修道女たちはつねにどこでも教える心構えになっ

ている」と述べていたが、総長メール・ド・フォダス Mère de Faudasはローマ法王ピオ九世の書簡によって修道会に命じられた極東布教への道に修道女を向かわせる決意をしなくてはならなかった。たまたまマレーシアの法王代理であるブーシニョ 狛下 Mgr. Bou-Chotはサン・モール会の行なっている修道女の養成を知って、パリ外国宣教会のブートル神父 Pèrè Beuret の斡旋で修道女派遣の依頼をメール・ド・フォダスに要請したのである。任地はマラッカであった。一八五一年十二月十六日、バレル神父 Pèrè Barre は五人の修道女を伴ってアンヴェール港から旅立ったが、希望経由の航海は修道院長となるメール・ポリヌ Mère Ste. Pauline の病死というふうな事故もあって不幸な結果に終わった。

一八五二年九月十四日、マティルドは総長メール・ド・フォダスからペナンの修道院長として極東布教に赴くよう命令を受けた。今度は海路ではなくて、幌馬車でスエズ地峡を横切る旅であった。マティルドは同月十七日に四人の修道女、アポリネール Appolinaire、グレゴワール Gregoire、アンセルム Anselm、ガエタン Gaétan を連れてパリを出発した。マティルドはペナン派遣の命令を受けてから出発までわずかに三日間しか余裕がなかったためか、家族とも会うことなしに旅立たなくてはならなかった。それ以後、マティルドは家族とは顔を合わせる事がなかったのである。

ペナンでは極めて質素な生活を送り、熱帯の風土・氣候や異教徒たちからの不信の眼などに苦しみながらも、マティルドは差し迫った任務を果たし、ペナンのみならず、シンガポールやマラッカにまで修道院を建て、捨て子のための孤児院、養老院、土着民のためとヨーロッパ人のための学校などを設立した。マティルドはとりわけ

幼い子どもたちの面倒をみ、その初等教育に専念した。このマティルドの活動はのちにセレンバン、クアランプールなど各地に修道院の設立を促す役割を果たしていたようである。

マティルドは彼女が伴ってきた修道女たちの協力をえて多数のひととをカトリックの教えに改宗させていたが、子どもたちに地理を教えているとき、日本の地図を描きながら、ふと「日出国」日本に通ずる道に沿って旅することを夢想することがあった。マティルドは神がそれを欲し、彼女が最初の修道女として日本に派遣されることを願った。だが、日本はまだ鎖国中であり、キリスト教の布教はきびしく禁じられていたのである。

フランシスコ・ザヴィエルが初めてキリスト教をわが国に伝え、一時期は信者も祈りを捧げることが許されたが、そのあと周知のように、三世紀に及ぶキリシタン禁制の時代を過ぎなくてはならなかったのである。

ペリーの来航（一八五三年）でわが国の国際的環境は大きく変わり、ついに開国を余儀なくされるや、キリスト教の宣教師たちも続々と来日し、フランスカトリックの人びとの活動が始まった。

一八七二年五月十九日、マティルドは日本における法王代理であるプチジャン Petitjean 司教から一通の書簡を受けとった。日本布教の要請であり、そこにはキリシタン禁制の解かれる希望がみえ、きたからすぐに修道女に来てもらいたいという文面が綴られていた。マティルドはかねての念願がかなう喜びを覚えたが、独断で決めるわけにもいかず、シンガポールにいるルテュルデュ司教の指示を仰ぎ、パリのサン・モール会本部の総長メール・ド・フォダスに前日開通したばかりの電信を使って問い合わせた。五月二十日正

午頃にメール・ド・フォードアスは正式にこれを許可する旨、打電した。マティルドは翌二十一日朝八時にその通知を受けて、ここに来日が決定した。

マティルドはサン・モール会の創立者ニコラ・バレ神父の精神にのっとりて孤児や貧しい人びとの救済に当たってきたが、そうした功績がプチジャン司教の知るところになり、開国直後の日本では有能な修道女の活動が必要であり、マティルドにその任に当たってもらうことになったのである。ジラルル Girard 神父が生前すでにシンガポールでマティルドに会っていたこともこの人選に少なからぬ影響があったものと考えられる。マティルドは日本における法王代理であったジラルル神父と一八六〇年に会ったときの感激を思い出しながら、日本に赴く準備を急いだことだろう。

六月十日、マティルドは四名の修道女、ノルベル Norbert、フェルディナン Ferdinand、ジェラーズ Gelese、グレトワール Grégoire とともにシンガポールを出港し、香港でヴォルガ Volga 号に乗りかえ、同月二十八日早朝五時に横浜に入港した。

「翌朝、愛する日本々土が見えて来ました。起伏の多い海岸線、重なる緑の岡、入江、燈台、小さな村落、行きかう無数の漁船……私共はどんなに深い愛をこめてこれらを見つめたことでしょう。すべては私共の興味をそそり、私共の心に語りかけてくるのでした。

(中略) 私共は朝の五時に港に着きました。直ちに二人の神父様を迎えに上って来て下さり、小船に乗りかえましたが小船が岸に着いた時、もし傍に誰もいなければ、私はそこにひざまづいてこの日本の土に接吻したことでしよう。」(マティルドの「手記」)
マティルドは「手記」に來日の感激を綴っている。マティルド一

行を出迎えたのはプチジャン司教であった。プチジャン司教はマティルドたちを横浜天主堂に案内し、ミサをあげた。それからいっしょに食事をとり、必要な二、三の日本語を教え、マティルドたちを仮の住居に案内してくれた。

マティルドたちが最初に覚えた日本語は「雨降ります」「風吹きます」であったという。マティルドたちはその住む国の言語を十分に話せなくては伝道が成功しないことをシンガポールなどの布教活動でいやというほど思い知らされていたのである。すでに五十八歳のマティルドはまるで若者のようにむずかしい日本語の学習に取り組んだ。マティルドは当初は山手五十八番地の小さな家を借りて住んだが、そこに孤児や捨て子を収容して世話に当たった。横浜最初の孤児院であり、仁慈堂と名づけられた。

同年十一月一日マティルドは山手八十三番に五千三百五十九平方メートル(千六百二十四坪)の土地を借り受けているが、その名義は「佛國尼學舎」となっている。

マティルドの活動が孤児と捨て子の世話のみならず教育の面に拡がりをみせていることが、そうした名義に看取される。マティルドは明治六年に仁慈堂の財源確保とその任務に必要な若い修道女探しのためにひとまず帰国したが、フランス公使の援助をえて居留地在住の外国人子女の教育と貧困家庭の児童の教育のために学校を設立した。サン・モール學校と葦女學校の設立がそれである。学校は山手八十八番地に土地を借り受けて建てられたものである。

「是年佛國婦人、サン・マティルダ横濱山手居留地ニダーム・ド・サンモール學校及葦女學校ヲ設立シ前者ニテハ在留外人ノ子弟ヲ教育シ後者ニテハ本邦ノ孤兒ヲ收メテ救済教育ス」

『神奈川県教育史』の明治七年の項には右のような記述があるが、これからも蕙女學校が仁慈堂の発展したものであることがわかる。仁慈堂から蕙女學校までの三年間に児童數三百五十人、乳幼児八十人、里子二百五十人と、収容人員も大幅に増加している。

サン・モール会は東京築地にもサン・モール學校、修道院、孤兒院、女子語學校をこの年に設立しているが、マティルドは明治七年十二月二十七日、シンガポールで、横浜と築地の修道院長などの任を委ねていたシスター・ノルベルの死の報を受け、翌年一月シスター・ザヴィエル、シスター・エマニュエルを伴い、横浜に戻った。

「私はシスター、ノルベルの死によって途方にくれました。一八七六年一月六日、二人のシスターを連れてシンガポールを發ち、日本に向かいましたが、船にのるやすぐ船室に入り、ひとりですう存分泣きました。」(マティルドの「手記」)

マティルドはノルベル修道女の死でシンガポールの修道院長として日本のサン・モール会の事業をも統率していることが不可能になったのを知り、日本に戻る決心をしたのであった。すでに一八七二年十月二十七日にはシスター・フェルディナンも病死していたのである。そこにシスター・ノルベルの死であり、一時は途方に暮れる思いであった。

マティルドは自分も日本の地に骨を埋めようと横浜修道院長として決意も新たに來日し、蕙女學校の経営に携わるとともに、築地での活動にも力をそそぐのであった。

マティルドはとくに女子教育に力を入れることになり、そこにフランスカトリックの宣教活動の新しい局面が開かれていくことになった。

仁慈堂、蕙女學校などにおける孤兒の救済では、衣食の世話のきわめて莫大な費用に加え、働き手である修道女の不足など、さまざまな困難がマティルドの上に襲いかかった。資金の調達と要員の育成、とくに日本人の修道女の養成が急務となった。シスター・マルグリット・山上はそうしたマティルドの期待にこたえる邦人修道女として活躍した。孤兒や捨て子をときには自分の戸籍に入れて山上姓を名乗らせるなど、その世話を受けた者は三千六百人にあがったという。

蕙女學校は尼寺の孤兒院の愛称で横浜の人びとに親しまれたが、ここで養育され、教育を受けた女子は外国人や日本の商人の家庭で働き手として歓迎された。

明治三十二年十月二日、サン・モール会は横浜紅蘭女學校を開校した。この年、条約改正の実施に伴い、外国人も私立學校を經營することが認められたので、従来非公認で女子教育に当たってきたキリスト教主義の私塾も私立學校の許可を受けて「高等女學校に類する各種學校」として区分されることになったのである。教育勅語の趣旨を教える修身が高等女學校では必修であったこと、一般の教育を宗教のほか独立させることなどの理由で「高等女學校に類する各種學校」の認可をあたえられたのであるが、横浜紅蘭女學校は日本におけるサン・モール会最初の正式の女學校として発足したのであった。

「紅蘭女學校は中區山手町八十八番に在る。本校はロマン・カトリック系佛國サンモール修道會の經營で明治三十二年十月二日の創立である。三十九年三月一日、財團法人サンモール學院の組織されるや、本校は其本人の手に移された。併し、此基礎的事業とも云ふ

べきゲーム・ド・サンモール學校は既に遠く明治五年六月に創立せられ、佛人メール・サン・マツルダ女史に依り、永年教育事業と共に社會救濟事業が行なわれていたのである。本校最初の校長はメール・サン・ルドカール女史、俗名エリザベット・ヌリで、開校當初は校舎四十三坪、第一年の生徒數僅々三人に過ぎなかった。」〔横浜市史稿 教育編〕

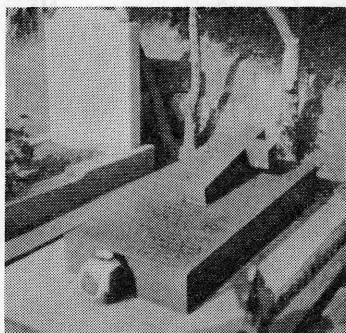
教科内容としては修身、國語、数学、地理、歴史に加えて、フランス語、ドイツ語、英語、音楽であった。死の前年（一九一〇年）マティルドは『ジャパン・ガゼット』紙のインタヴューで、仏・獨・英の三カ國語が教えられたことを語っている。ただし、マティルドは開校時の生徒數は二名で、一九一〇年現在百二十名であることをつけ加えている。

なお、横濱紅蘭女學校に先だつ二年前（明治三十年）、東京の葵町（のちに平河町）に雙葉會が設けられ、良家の子女を対象にして語学（フランス語、英語）、音楽、技芸などを教えた。明治三十二年築地の女子語學學校はこの雙葉の名称をとって雙葉高等女學校として新しく発足した。メール・テレーズ Mere Therese が初代校長となったこの學校は翌年には麴町の新校舎に移った。

さらに、明治三十六年には静岡のレイ神父の要請から駿府城のほとりに修道院が建てられ、佛英女學校が開校されたが、これがのちの不二女學校、静岡雙葉學園へ発展して行くのである。

マティルドが種子を蒔いて育成した社會事業と教育事業は九十七歳十一月というその死（明治四十四年一月二十日）によつても終わることがなかった。横濱山手八十三番地のサン・モール会の一室で老衰のために静かに昇天したメール・マティルドの死後にむしろ

大きな成果を結んでいるのである。関東大震災で一時は烏有に帰したものの、修道女たちの尽力で旧校地に新校舎を竣工して、再興を計り、今日のカトリック教育の一翼を担う雙葉學園へと発展していったのである。



マティルドの墓（横濱外人墓地）

社會福祉事業から女子教育事業とその活動の場を見出したメール・マティルドは来日当時既に六十歳に近い年齢であり、決して個人的なスタンドプレーをみせることなく、サン・モール会の指導的人物として組織の一員の枠を越えず、地道にその使命を果たし五千六百七十八名の洗礼を行ったのちに、横濱の地に骨を埋めた至高の魂のひとつであった。横濱外人墓地で、来日以来苦勞をわかちあつたシスターたち（ノルベル、グレゴワール、フェルディナン）とともに同じ墓の中に葬られているメール・マティルドはフェリス女學院の創立者キダー女史のように知られることの少ない修道女であろう。だが、その功績において決して優るとも劣ることのない人物であった。

【付記——最近、渋川久子、小河織衣、今村桂子のみなさんが、それぞれ立場で日本におけるサン・モール会の活動、メール・マティルドについて調べられているが、本稿執筆に際して参照させて頂いた。記して感謝したい。】（一九八〇・二・一六）